

話したい！話せた！伝わった！児童が主体となる授業づくり

～課題解決型の外国語活動を通して～

東京都大田区立入新井第五小学校

〒143-0016
東京都大田区大森北6-4-8

<http://academic2.plala.or.jp/irar5e/>

1. 研究の背景

社会的背景は

- グローバル化が急速に進展し、国際人として海外で活躍できる人材、異なる文化や価値観をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図る人材が求められている。
- 2020年より「英語」（5．6年）「外国語活動」（3．4年）が導入される。
- 大田区においても国際空港「羽田」が開港し、「国際都市おおた」として外国人に親しまれるまちづくりを目指している。

2. 研究の目的

グローバル化が急速に進展し、世界で活躍する人材が求められている。他国の人と様々な地球規模の問題を解決したり、他国との経済競争の渦の中で積極的にコミュニケーションを図ったり出来る人材の育成である。また、次世代を担う子どもたちは、更に日本にいながらも他国の人とコミュニケーションを図らなければならない場面が多くあるであろう。その時、多様な文化・価値観を持つ人々に対して、偏見を持たずにコミュニケーションをとりながら、豊かな人間関係を結び、様々な人々と協力して、共存・共生していくことも必要となる。

本校の児童は、素直で落ち着いた学校生活を送っているものの、自分の感情や思いを表現したり、友だちの思いを受け止めたりすることが十分ではない。という実態が挙げられた。

そこで、他者と関わり、自分とは異なる人を受け止め、積極的にコミュニケーションをとろうとする児童を育てたいと考え、外国語活動を窓口にして、友達と協同しながら、簡単な英語を使って、自分の伝えたいことを表現したり、友達の思いを受け止めたりする活動を通して、コミュニケーション力を養いたいと考えた。

3. 研究の方法

研究主題を「話したい！話せた！伝わった！児童が主体となる授業づくり～課題解決型の外国語活動を通して～」とし、担任は、児童が英語を話さなければならない場を設定し、児童はそれに向かって、「話したい」という思いをもち、友達と協同しながらその思いを達成するために主体的に活動していく。このような課題解決型の活動を軸にし、研究授業を中心にしながら研究を進めていく。

○年間授業時数

- ・低学年は余剰時間、年間8～10時間・中学年は総合的学習の時間10時間～12時間「英語を扱う時間」で実施
- ・5・6年生は「外国語活動」、35時間実施。

○研究授業の実施

- ・全学級が研究授業を年1回行い、協議会を実施し、研究を深める。
- ・研究推進委員会が中心年間授業計画を計画。各分科会において、研究を深め、研究授業を提案、講師を招聘し、全体会で協議後、指導講評を頂く。

○日常的に英語に触れる時間の設定

- ・全教員による年間を通しての英語の一人一取り組みの実施をする。
- ・環境部を中心に、校内の掲示物、お昼の放送の工夫をする。

4. 研究の内容・経過

23年度から校内研究を「外国語活動」とし、全学年で学習指導要領の第5・6学年の目標である「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成」を目指した。英語を用いる必然性のある状況を教師が設定し課題解決型活動の授業を進めた。聞き手を意識することで、児童に「伝えたい」という気持ちが生まれ、伝え方を工夫し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られるようになった。しかし、自分の伝えたいことを英語で表現することは、インプットの少ない児童にとって容易なことではない。更に、外国語活動が実施されている5・6年の児童を除いては、ほとんどの児童にとって学校内で英語に触れる機会なく、授業中以外の外国語との持続的な接触の欠如が課題となった。

そこで24年度は「話したい！話せた！伝わった！児童が主体となる授業づくり」をテーマとし、前年度同様に課題解決型の授業実践をし、児童がより身近に英語に触れる環境作りを心がけた。掲示物や、校内放送、朝の会や帰りの会を活用し、「入五イングリッシュ」として自己や学校紹介などの基本的な英語表現に触れる場面を多く設定した。

25年度には、更に全教員による「一人一取り組み」を試みた。児童が普段の生活の中で、英語に触れ、親しむための取り組みを教員一人一人が自分の考えた手立てで行う実践である。また、パナソニック教育財団助成校としてICTを効果的に活用することも積極的に行った。ICTを効果的に活用すること、より効率的、効果的に英語表現や英単語を習得したり、自主的な活動が期待できたり、更に、大型テレビや電子黒板による音声や映像を通して、児童の学習意欲や集中度を高めることが出来た。

以上のように、英語に触れる場面を多くの場で意図的に効果的に工夫し設定することによって、児童の言語材料が増え、より英語を身近なものと感じ、抵抗なく使えるようになり、課題解決学習に生かせるようになってきている。

5. 研究の成果

- ・課題解決型のプロジェクト活動を指導者が積み重ねることで、教材の開発や教具の充実が進んだ。
- ・外国語活動を進める上で、外国語指導員に授業を任せるのではなく、担任が主導する学習形態が確立した。外国語指導員は英語を発音したり、日本語に英訳したりといった役割が明確になった。
- ・学年相互の交流や学年を越えた交流など、活動のねらいに応じて、創意工夫ある学習形態を実践する事が出来た。

- ・ 入五イングリッシュ（全学年共通フレーズで授業を進める、授業のはじめ、終わりのあいさつなど）、設定したことで安心して授業に臨めた。
- ・ 一人一取り組みを行う事で、全教員で英語教育に取り組み、授業時間以外に日常的に児童に英語に触れさせるための工夫がより充実、発展したものになった。
- ・ 聞き手も話しても相手の事を意識しながら、繰り返し表現しようとしたり、ジェスチャーを交えたり、ゆっくり発言したりと工夫し、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿が見られた。
- ・ 児童は課題解決のため、知りたい英語表現を電子辞書や辞典で主体的に調べたり、外国語指導員に進んで尋ねたりする姿が見られるようになった。
- ・ 英語で発表するなど必然性のあるゴールを設定したことで、児童は英語表現を繰り返し練習し、発表時は、達成感、満足感を味わう事が出来た。
- ・ 掲示物や教員の一人一取り組み等、日常的に英語に触れる場面を意図的に設定したことで、児童は英語を身近なものに感じるようになった。
- ・ ICTを効果的に取り入れることで、児童の興味・関心を高めることが出来たり、身につけさせたい言語材料を自ら習得出来たりすることが出来た。
- ・ 電子辞書の活用により、自然と文字情報に触れることが出来た。
- ・ デジタルカメラ動画機能を利用することで、自分達の発表を客観的に見ることが出来、発表を更に工夫することが出来た。

6. 今後の課題・展望

- ・ 児童が更に主体的に活動するためには、教師は単元を設定する際、児童の実態を把握し児童の興味の持ちそうな題材を教材化して、学習への動機付けを明確にさせる必要がある。
- ・ 低学年から発達段階に見合う単元の開発、また中学校英語への接続のため、中学校と意図的・計画的な連携を実施する必要がある。
- ・ 積極的にコミュニケーションをとろうとする児童を目指すために、成果を図りやすい技能や、英単語の習得量だけで評価しないよう評価規準を発達段階に合わせて明らかにする必要がある。
- ・ 低学年、中学年は授業時数の確保が難しい。効率のよい指導計画の工夫や、授業時以外での時間の確保を設定する必要がある。
- ・ 教員の一人一取り組みは、個人に任せられたために、取り組みに差が出た。実践する時間を設定し、低・中・高学年部会で取り組みのテーマを設定したい。
- ・ 調べたり、発表練習をしたりする時の活用だけではなく、録画や、録音を聞いて修正したり、振り返ったりして次の活動にも繋ぐ場面を更に増やしたい。

7. おわりに

児童自ら設定した課題の解決に向けて、伝えたい英語表現を決め、協力し合って練習し、発表する活動は、解決ができたという満足感を味わうことが出来る。しかしながら、自分の伝えたいことを英語で表現することは、インプットの少ない児童にとって容易なことではない。また授業時間も限られている。そのような現状で、ICTを効果的に活用することは、時間を効率的・効果的に使うだけに留まらず、児童の動機付けには大変有効である事が今年度の研究で分かってきた。児童は映像によって集中度を高め、効率的な反復練習によって基本の英語表現を習得することが出来る。その上で児童は自主的に、言いたい英単語を電子辞書で調べたり、ICレコーダーを使って反復練習したりした。児童は課題に対して、自

分が「話したい！」ことを、調べ、解決し、繰り返し練習し、英語で相手に伝えることで「話せた！」と実感した。この自信が、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度に繋がっている。更に、「英語で伝えたい！」という思いを喚起させるためには、普段の生活の中で、英語に触れる場面を多くの場で意図的に設定した。そのことによって児童の言語材料が増え、より英語を身近なものと感じ、抵抗なく使えるようになってきている。ICT を活用しながら児童が英語に触れる活動を保証し、英語表現の定着の伸張を更に図りたい。本校は来年度、研究の成果を大田区教育研究推進校として都内・区内の小学校教員に発表する。ICT 機器を有効に活用しながら研究を行った成果を示したいと考える。研究発表会に参加して下さった教員が自校で外国語活動の時間に ICT 機器を使った授業を実践していただければと考えている。

< 参考文献 >

「プロジェクト型外国語活動の展開」 東野裕子・高島英幸 共著 高陵社書店

「児童が創る課題解決型の外国語活動と英語教育の実践」 高島英幸 編著 高陵社書店